

課題研究③ 子どもの健康・安全

生きる力を育む炊き出し訓練

神奈川県・子中保育園 桑田幸生・野村美樹・伊藤千晶・大塚裕子・大塚貴史

1. 背景と目的

2017年度から子中保育園では人員体制が一新し、理念や方針、子どもに願う姿、方針に基づく保育活動も大きく変わった〔伊藤2019〕。この変化の中で組織としての防災活動の一つである毎月の避難訓練も、「子どもたちに避難行動をさせる訓練」から「子どもが避難の重要性を認識した上で自ら行動する訓練」へと方針や内容が変わっていった。また、避難訓練を含む防災学習の一環として、2017年度末に消費期限を迎える災害用食料備蓄品の廃棄を避けるため、それらの食品を使って炊き出し訓練を行うことにした。この炊き出し訓練も、避難訓練と同様、子どもたちが自ら考えて行動する実践になることを目指した。また、保育者にとっては、1) 子どもたちが自ら考えて行動することを目指す訓練をデザインし実践する、2) 実際の災害時炊き出しの課題を浮き彫りにする、という二つのねらいが想定された。

本稿では、避難訓練の方針同様に、「子どもが訓練の重要性を認識した上で、自ら行動する訓練の実施を目指す」ことを大きな目的として、2017年から2021年までの5回の炊き出し訓練について、各年度の実践のねらいと内容、考察として実践で得られた課題を次年度どのように解決したかについて示す。なお、本稿の内容は、保育日誌および炊き出し訓練の記録に基づき記述している。

2. 炊き出し実践に関する検討と課題

震災、台風被害、土砂災害などの被災後、被災支援活動のひとつとして災害時炊き出しの重要性が指摘されている〔小野寺2015〕。炊き出し実践については、災害時炊き出しに必要な食糧備蓄品と、調理、栄養、衛生、被災者の心理などの各側面に関する課題が検討されている〔坂本2011〕。坂本らは、災害時に水道、ガス、電気などのライフラインがどの程度利用できるかにより、炊き出し実践にどのような準備が必要かを示している。とくに、水については飲料水、調理用水、洗浄用水など大量の水が必要になると指摘している。当園の現在までの炊き出し訓練では、調理用水のみを備蓄水で対応している。電気やガスについては利用できないことを想定し、調理熱源を備蓄用の炭による焚火としている。

小野寺らは、所属する大学が災害発生時に避難所の役割を担うことを想定したうえで、災害支援の研修として災害時炊き出しを企画、実践している〔小野寺2015〕。しかし、訓練ではあるものの、実践時間が限定されてい

ることや、不特定多数の参加者に興味を持ってもらうことから、ホットドッグなどの簡単な調理を訓練メニューとしている。当園の炊き出し訓練では、子どもたちや園児の給食代わりになるかもしれないことや、場合によっては近隣の方々にも提供する必要があること、かつ、炊き出しを担う当事者である職員と園児が訓練でも被災時でも変わらないことから、備蓄食料を利用して米を炊き、汁ものを作るという炊き出し調理とした。

一方で、炊き出し実践は、子どもたちにとっては防災学習として体験から学ぶという意義もある。大阪府の町立中学校の家庭科教育の取組みとして行われた炊き出しの企画実践は、文化的実践の学びとして位置づけられており、長期間のプロジェクト学習として、経験者からの話を聞き、生徒自身が炊き出し会の企画や、炊き出し料理のメニュー、調理方法を計画し、調理実践している〔忽那2010〕。保育所での実践においても、炊き出しの意味を事前に伝えること、準備や調理、片付けの過程で子どもたちも役割を担うことが重要と考えている。

以上の検討を踏まえ、当園での炊き出し訓練では、実質的な避難訓練と防災学習の二側面を持つものと位置づけ、毎年企画実践している。

3. 炊き出し訓練の取組み

2017年度から2021年度までの5年間の炊き出し訓練の概要を表1に示す。2017年度に始めた炊き出し訓練は、毎年、保育者が取り組んでみたいこと、かつ、前年度の課題を解決することを追加修正しながら進めた。2018年度以降の取組みでは、表1の中で下線部を引いた活動が追加修正の活動内容に相当する。2017年度の事前学習と炊き出し実践は初めての試みで、以降の基準となるため下線対象としている。

本節では、表1中の下線部の活動内容について詳述することにより、開始から5年に渡る取組みの全容を示す。

3.1 2017年度の取組み

2017年度の炊き出し訓練の試みは、次年度以降の基準となった。表1に示すように、屋外調理による炊き出し訓練の実行可能性と、実施時の課題の把握が保育者にとって2017年度の目的であった。子どもたちにとっては、炊き出し実践に積極的に関わりながら、炊き出し訓練の意味を体験的に学ぶことが目的であった。これらの目的は十分に達成され、とくに子どもたちの協同的な体験へ

表1 過去5年間の炊き出し訓練の取組み

実施年度	ねらい	子どもたちによる炊き出し活動の内容	炊き出しメニュー
2017 (2018.2.22)	<p>○初めての試みとして屋外調理による炊き出し訓練を実施することにより課題を把握する</p> <p>○子どもたちが積極的に役割を担えるようにし、炊き出し訓練の意味を体験的に学ぶ</p>	<p>○事前学習 (2/19地震でライフラインが止まることについて)</p> <p>○炊き出し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米を炊く ・レトルトカレーを温める ・みそ汁を作る 	<p>炭火炊きご飯</p> <p>レトルトカレー</p> <p>みそ汁 (白菜、青梗菜)</p>
2018 (2018.12.19)	<p>○子どもたちが畑で育てた野菜を収穫し、調理素材にすることにより、緊急時における自給自足を試みる</p> <p>○子どもたちが被災時にどのような環境でも排泄ができるような体験をする</p>	<p>○事前学習 (12/14 家具の倒壊やガラス等の飛散について)</p> <p>○畑の野菜収穫</p> <p>○炊き出し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米を炊く ・みそ汁を作る <p>○畑での排尿体験</p>	<p>炭火炊きご飯</p> <p>みそ汁 (白菜、青梗菜)</p>
2019 (2020.2.3)	<p>○子どもたちにも影響が大きかった台風水害について、子どもたちの避難体験も踏まえて被害を学ぶ</p> <p>○使い捨てができる食器の食べにくさもある紙製食器を作って使ってみる</p>	<p>○事前学習 (11/21 台風による水害)</p> <p>○畑の野菜収穫</p> <p>○紙製簡易食器の作成</p> <p>○炊き出し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米を炊く ・みそ汁を作る <p>○紙製簡易食器で食べる</p>	<p>炭火炊きご飯</p> <p>みそ汁 (小松菜)</p>
2020 (2021.3.24)	<p>○コロナ禍における炊き出し訓練としてレトルト食品 (ご飯) を利用し、加工することにより保存食となることを知る</p>	<p>○事前学習 (2/25 模型を使って家が崩壊することのしくみを伝える)</p> <p>○畑で野菜収穫</p> <p>○炊き出し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・煎餅づくり ・みそ汁を作る 	<p>煎餅づくり (レトルトご飯を温めた上で薄く延ばして焼いたもの)</p> <p>みそ汁 (大根)</p>
2021 (2021.9.16)	<p>○より誰でもが調理できることを目指し、飯盒炊きを実践する</p> <p>○2歳児、3歳児、4歳児が自分で危険物を避けて避難する訓練をすることにより自主的避難の意識を高める</p>	<p>○事前学習 (9/15 物の倒壊や破損、飛散について)</p> <p>○野菜収穫 (小松菜)</p> <p>○炊き出し</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米を炊く ・みそ汁を作る <p>○子どもたちが自分で判断して行動する避難訓練 (4歳児以下)</p>	<p>飯盒炊きによるご飯</p> <p>みそ汁 (子どもたちが栽培したシイタケと小松菜)</p>

の参加は、写真1の写真にも示すように、子どもたちにより自主的に、積極的に行われた。

(1) 事前学習

写真2は事前学習の様子である。事前学習のねらいは、

なぜ炊き出し訓練が必要なのかを子どもたちが理解することであった。写真2は4、5歳児を対象に、震災時に水道、ガス、電気などのライフラインが止まることについて写真や絵を見せながら保育者が話をしている様子である。ライフラインが止まることにより、どのようなこ



① 道具の水洗い



② 湯沸かし、火の調節



③ 米の準備



④ 米の計量



⑤ 米洗い



⑥ 給水



⑦ 火の調節



⑧ みそ汁の具材準備



⑨ レトルトカレーの温め準備



⑩ みそ汁づくり



⑪ みそ溶き



⑫ 味見



⑬ ご飯の炊き上がり



⑭ 配膳

写真1 炊き出し調理のプロセス



写真2 2017年度事前学習

とが困るかを問うと、水や電気が使えなくなることを指摘する子どもがいた。また、「地震で物が倒れたり、壊れたりして道路が通れなくなったらママはどうやってお迎えに来るの?」「給水車の水が無くなったらどうするの?」などの質問が出た。以下に示すのは当日の保育日誌の記述である(下線は筆者による)。

保育日誌より(2月19日 4、5歳児クラス)

木曜日に行う炊き出し訓練とは何か、どのような事するのかを、絵や写真を見ながら説明を聞く。写真や絵を見る事でイメージしながら、保育士が質問したことに対し、自分の言葉で発言していた子どももいた。また、災害について理解したからこそ「怖い」と言葉に出していた子どももいたが、「先生がいるから大丈夫だよ」と声を掛けると安心してしている様子だった。(略)

震災を「怖い」と感じたのは、適切に被害事実を事実として理解できたからだと考える。「怖い」と言語化できなかった子どもたちの中にも不安感を覚えた子どもはいたかもしれない。担任の応答は当該の子ども以外にも適切だったと考える。

事前学習のねらいが子どもたちに伝わったことが分かるエピソードがある。5歳児Aの母が事前学習の日の帰宅後、Aに向かって「明日の炊き出し訓練、楽しみね!」と声をかけると、Aは「楽しみじゃないよ。訓練だから真剣にやるの」と答えたとのことであった。実際にAは炊き出し実践に対して、友だちと協調しつつ楽しそうに話しながらも真剣に取り組んでいた。

(2) 炊き出し実践

2017年度の炊き出し訓練は、初めて屋外調理を行った。2017年度以降も、この流れが基本になるため写真1に詳しく示す。

4、5歳児は調理過程に参加するため、事前に、体調が悪い子、手指にケガのある子は参加できない旨を子どもたちや保護者に伝えた。炊飯とみそ汁の味付けは5歳児に、みそ汁の具材となる野菜の準備は4歳児に仕事を任せた。屋外調理自体、初めての子どものも多く、ふだんは、はしゃいだりふざけたりする子どもも、緊張気味に真剣に取り組んでいた。

写真1③⑤⑩に見られるように、子どもたちは保育者からの指示がなくても、一人でできないことは声を掛け合い、重い物は協力して運ぶことを行っていた。5歳児はとくに、写真1②⑦に示すように、日常的には行わない炭火の扱いについても、慎重に丁寧に行っており、時折、事前学習で学んだことを「電気とか使えなくなるから炭の火でご飯つくるんだよね」のように言葉にし、「地震がきたら、みんなでご飯つからないといけないから真剣にやるんだよ」「うん、知ってる」のように友だちと話しながら作業していた。

当日の子どもたちの様子は、保育日誌にも記録されていた(下線は筆者による)。下線①②は、それぞれ協調性や主体性を示す言動であり、下線③は日誌の中で担任も指摘するとおり、事前学習の内容を理解したからこそその発言と考える。

保育日誌より(2月19日 4、5歳児クラス)

年長組は主に炊飯と火の元の作業をする。お米の研ぎ方は「爪は立てないんだよ」と①お互いに知っていることを教え合い、二人一組になると役割分担をせずとも自然と協力し合いスムーズに米とぎを進める。その後の作業も②自分で仕事を見つけて動き、自分の手が空くと年中やひまわり組の作業にも「何か手伝うことある?」と聞いて回り意欲的に取り組んでいた。

米とぎの際に水道をひねって水が出るところを見ると③「なんだ、今日はお水出るんだ!」と驚いていて、事前学習の時の学びが根強く残り、子どもたちの中で学びとして受け止められていることがわかった。友達同士でみんなが経験できるようにローテーションで作業を行い、「まだ〇〇ちゃんやってないよね」と声を掛け合う姿に、相手への思いやりや周りを見る力があったことを感じた。とくに目立ったリーダー格の子がいなかったのが指示されることがなかったこともあり、それぞれの力や良さが出ていたように思う。卒園の前に成長した姿が見られてとても嬉しく思った。

記録や日誌に残されている子どもたちの言動に見られるように、2017年度のふりかえりでは、事前学習の重要性が再認識された。また、被災時には店に野菜を買いに行けるわけではないため、野菜などは畑で栽培して利用したい、そのために日ごろから畑活動を保育に取り入れていきたいという声も上がった。

3.2 2018年度取り組み

2017年度のふりかえりをもとに、2018年度は事前学習を強化した。炊き出し実践については、栽培した野菜を活用するため、子どもたちと共に年度の始めから、農作業にも注力した。また、断水時の排泄体験のため屋外に仮設トイレを設置することにした。

(1) 事前学習

2017年度の炊き出し訓練を中心的に企画、実践していた桑田が防災研修に参加し、その折の学びを活かして、事前学習を改善した。前年度のライフラインに関する学習に加え、子どもたちが自分の頭を守るための「ダンゴ虫ポーズ」を取り入れ(写真3①②)、家具などが倒壊して自分が下敷きになるかもしれないことを共有、体験し(写真3③④)、窓ガラス等が割れて飛散した際のイメージを、卵の殻を割り素足で踏むことにより疑似体験する(写真3⑤)といった事前学習を計画、実践した。また、ライフラインの説明の際、水道が止まってしまうとトイレも使えなくなることを伝え、翌日の炊き出し訓練では畑で排泄することを伝えた。

(2) 炊き出し実践

2017年度のふりかえりで、1)被災時には店に野菜を買いに行けるわけではないため、野菜などは畑で栽培して利用したい、2)保育園のトイレが断水で使えなくなった場合に備え、子どもたちが屋外でも排泄できるようにしておきたい、といった課題が上がった。これらは、2017年度の問題点ではなく、むしろ、被災時の現実的な課題として提案された。2018年度は、この2点を実現するため、園の畑で栽培していた青梗菜と白菜をみそ汁の具材に利用し(写真4)、畑の中で栽培エリアと離れた場所にテントを張っただけの仮設トイレを設置し子どもたちが利用する(写真5)よう促した。

2018年度も役割分担は、5歳児が炊飯、4歳児がみそ



① 身を守るダンゴ虫ポーズ



② ダンゴ虫ポーズの実践



③ 家具の倒壊イメージを共有



④ 倒壊イメージを体験



⑤ 卵の殻でガラスの飛散イメージを体験

写真3 2018年度事前学習



写真4 畑で栽培していた青梗菜と白菜を収穫し洗う



① 畑の屋外トイレ



② おしっこの後に土を掛ける



写真5 屋外トイレの体験

汁の準備として野菜の収穫、洗う、千切って細かくするといった作業を担当した。畑の活動は、2018年度の初夏から始めているため、子どもたちは収穫にも慣れており、丁寧に洗っていた。4歳児Bは、他児が飽き始めた際も、使う野菜をすべて洗い切るまで一人で仕事を続けていた。Bの姿を見て、また作業にもどってきた子どももいた。

仮設トイレでは、写真5①のように外部から見えないように柱を低くしてテントを張った。テント内にトイレ用紙と消毒用拭き、土を掛けるためのスコップを用意した。このテント内で、子どもたちが自分で穴を掘って排尿し、排尿後に土をかけ（写真5②）、手を拭いて出てくるという過程を子どもたちが体験した。訓練に戻る際には園庭の水道で再度手を洗った。この体験については拒否する子どもがいれば強制しない方針であったが、子どもたちは取組みのねらいをよく理解しており、4歳児、5歳児は全員、屋外での排泄を体験した。トイレテントから出ると「地震でお水が出なくなったらトイレも流せないよね」「土をかけないと臭くなっちゃうからたくさんかけた」のように、感想や意見を述べていた。なお、屋外での排便の処理は子ども自身にとって難しさもあり、保育者の手が十分でないこともあるため、園舎内のトイレを使用することにした。

2018年度実践のふりかえり時、屋外トイレは、子どもたちにとっても保育者にとっても体験としては貴重であったが、実際の被災時には、重量のあるテントの組立てや設置が時間的、体力的に可能であるかどうかという懸念が出た。2021年現在、伸縮式の簡易テントをブルーシートで被うといった案は出ているものの、まだ実施は試みていない。実際の断水時には、2018年度の仮設トイレは必要な対策となる可能性もあるため、試みとしては重要であった。2018年度に行われた畑の野菜を利用する試みについては、今後も継続していきたいと保育者からの賛同があったため、次年度も継続することにした。

子どもたちの姿としては、積極的で活発だった昨年度の年長の卒園後、2017年度同様に子どもたちが自主的に炊き出し訓練に参加することができるかどうかを事前には懸念していた。しかし、2018年度も子どもたちは、「こっちは終わりました！次は？」や「自分のが終わったから

年中さんのお手伝いしてもいい？」のように、保育者が指示をしなくても自分から積極的に仕事を見つけて取り組んでいた。その様子が当日の保育日誌にも記述されている。

保育日誌より（12月19日 4、5歳児クラス）

年長はお米を炊く。以前行っていたお米とき当番の手順を思い出しながらスムーズに行っていた。また、自分達で役割を決めながら取り組む姿勢もみられた。（略）

また、炊き出し訓練における子どもたちの生き生きとした様子は、年下の子どもたちにも影響を与えており、以下の日誌のように参加意識を促していた。

保育日誌より（12月19日 2歳児クラス）

炊き出し訓練で味噌汁チーム（4歳児クラス）を見学していたちゅうりっぷ（2歳児クラス）の子どもたち。じっと4歳児たちの様子を見ていた。「やってみよう」という様子が伺えるので、少しだけ青梗菜をちぎってみよう促した。給食時には「これ、こうやったの（ちぎる動作）」と満足げに話す。お味噌汁を何杯もお替りしていた。「自分で作ったの」と誇らしげに話していた。

炊き出し訓練ではあるが、畑の野菜を使用するという食育の一環にもなっている。（略）子中保育園の柱となる畑活動を取り入れながらの活動はとても良かった。

炊き出し訓練は、4、5歳児が中心となる活動であるが、2018年度からの提案である畑の野菜を活用する取り組みを「食育の一環」と捉え、異年齢の子どもたちにとっても学びの側面があることを2歳児クラスの担任保育士が指摘している。2017年度のふりかえりを2018年度に活かし、炊き出し訓練に留まらない保育活動の土台と認識していることが分かる。

3.3 2019年度の取組み

2018年度のふりかえりにより、2019年度は屋外トイレを実施しないことに決めた。例年通りの屋外調理による炊飯とみそ汁づくりを行い、みそ汁の具材となる野菜は畑で収穫した小松菜とした。2019年度の新たな試みとしては、使い捨てのできる紙製食器を、新聞紙とビニール袋で製作してご飯を食べる体験をした。

2019年度は台風被害の大きな年であり、園舎は被害がなかったものの、保護者や職員の中には、公民館や体育館などの避難所に避難した家庭もあった。また、社会的にも台風被害が大きく取り上げられ浸水被害や土砂崩れのニュースを子どもたちもよく見ていた。そこで、事前学習では台風水害について学ぶことにした。

(1) 事前学習

過去2回の事前学習は震災についてであったが、2019年度は、写真や絵を用いて水害について説明し(写真6①)、簡易的ではあるが土砂崩れのメカニズムについて盛り土とじょうろの水を用いて実験的に示した(写真6②)。

事前学習では初めて扱った水害テーマに、子どもたち、とくに5歳児からは様々な考えや疑問が出た。また、土砂崩れについては日頃の泥んこ遊びの体験も相まって、土の山が多くの水を吸収することによって崩れてしまうことを体感した。その際の会話や事前学習後の言動が日誌に残されているため以下に示す(下線は筆者)。子どもたちが事前学習をどのように捉えたかがよく示されている。また、子どもたちの健康や安全の土台となる学びの本質が示されているとも考えるため、長いが引用する。

保育日誌より(11月21日 4、5歳児クラス)

来週の炊き出し訓練の事前学習を行った。以前の台風被害について話を聞く。写真や道具でイメージを持ちながら話を聞いた。質問や発言は主に年長が積極的にしていた。5歳児Cは、救命ボートでの避難につい

て強く関心を持つ。

5歳児C「もし逃げ遅れちゃったら木も高いから(登れば)安全なんじゃない？」

保「でも水に沈まないのかなあ？」

すると、事前学習の後、戸外に出て、自分達で道具(大きな容器、水、木の枝、石、スコップ等)を集めて実験を始めた。水に木の枝を浮かべせると浮くことが分かる。

5歳児C「浮いたね！でも人間が乗るんだからそのくらい重い何かのせないと！そうだ！石がいいんじゃない？」

同じく5歳児のDとEと一緒に探す。何回か木の枝に乗せるが、落ちてしまう。

5歳児C「きっとバランスが悪いんだよ！同じ体重の石を見つけないと！」

5歳児D「たしかに、大きい石のほうがいいよね」

それぞれ手分けをしながら大きな石を見つける。地面に埋まっている大きな石を見つけて取ろうとするが、なかなか取れない。CとDで水を運び始める。

C「土は水に弱いから(埋まっている石が)取りやすいんじゃない？」

D「そうだね！さっき(事前学習で)言ってたしね！」

事前学習の内容から少し話がそびれたように感じたが、Cの疑問から展開した。実験を行なっている際には、事前学習で学んだことを復習しているような会話が続いた。この会話から事前学習のことを理解していると確信した。

日誌に示されている子どもと保育者の会話や、子ども同士の会話や言動は、一見多方向に広がっているように見えるが、下線部の発言を見ると一貫して事前学習での学びを言葉にしていることが分かる。日誌にも保育者の同様の気づきが示されている。



① 水害を説明する



② 土砂崩れを可視化する

写真6 2019年度事前学習

2019年度の炊き出し訓練は、当初、事前学習の一週間後を予定していたが、天候不順や行事の予定から日程が大幅に延期し、年明け2月3日に実施した。

(2) 炊き出し実践

被災時の断水の際には、食器等も洗えないため、2019年度の初めての試みとして、新聞紙やチラシで大きめの折り紙コップを作成し(写真7①)、それをビニール袋で包んで簡易食器とした(写真7②)。ご飯とみそ汁は例年通り、屋外調理としたが、主菜と副菜は給食室で調理してくれることになった。

炊き出し訓練は、その活動の内容から、どうしても年上の子どもたち中心の活動になってしまうが、2019年度の紙製の簡易食器の作成では2、3歳児の子どもたちも参加することができた。下記日誌の下線部(筆者による)に示すよう、子どもたちに参加意識が湧くような活動デザインおよび実践をすると、他の活動への展開も見られるようになる。

保育日誌より(2月3日 2歳児クラス)

3、4歳児に加わり、ご飯を入れる為のお皿作りに参加する。(略)完成したたくさんのお皿を見て満足そうに給食の話始めていた。年長児が作ったご飯を見に戸外にいくと、鍋に入ったご飯を見て不思議そうにしていた。炭から炎が上がっている様子も観察し、「赤いね!」と興味を示していた。

給食でチラシのお皿の中に入ったご飯を食べると、いつもの違いにはじめのうちは戸惑った様子だったが、上のクラスの友だちが食べる様子を見て真似をしながら食べていた。

保育日誌より(2月3日 0、1歳児クラス)

炊き出し訓練を見学する前に、火を使っている事を伝え、注意事項を話してから見学に行った。もも(1歳児クラス)の子供達は保育士としっかり手を繋ぎ、薪で炊いているご飯鍋を見ていた。たんぼぼ(0歳児クラス)の子供達は、散歩車に乗って参加したのだが、ご飯を炊いている事を伝え、「まんま」と言いながら指差して、興味を示す。その後、園庭で砂遊び

をしたのだが、Hはままごと用の鍋に砂を入れ、「たんぼぼちゃん(人形の名前)のご飯、焼いた」、「あちちっ」と話しながら遊び、Fは「やけどするよ」等、炊き出し訓練で覚えた事を遊びに取り入れていた。

見学前に、丁寧に分かりやすく、炊き出しについて話をすると、もも、たんぼぼの子供達なりに、真剣に興味深く見学する姿が見られた。また、話した事をよく覚えており、次の砂遊びにも繋がった事に、HとFは経験が積み重なっているのだと感じた。

炊き立てのご飯も見ることができ、また、新聞紙とビニールを利用した災害時用の器を使用した事により、物珍しさを感じたのか、昼食時の白飯の食べが、いつもよりとても早かった。体験の大切さを感じる。

簡易食器を使った4、5歳児は、「ご飯がビニールにくっついて食べれない」「○○はきれいに食べれたよ」「くっついたご飯もったいない」など言葉にしながら、ビニール袋についたご飯を最後までしっかりとこそげ取っていた。被災時には、いつものようにはいかないこと、不便なことが生じうる。炊き出し訓練では、事前学習と併せることで、「なぜ不便なこと、うまくいかないことが起こるのか」を学びつつ体験することに意義があるとあらためて感じた。

3.4 2020年度取り組み

2020年度はコロナ禍により社会状況が一変した。どの保育園でも同様と思われるが、活動や行事の縮小、中止が余儀なくされた。炊き出し訓練についても実施を検討したが、災害はいつでも生じうることから例年通りに実施した。

しかし、2020年度は趣向を変え、ご飯についていつものように巨釜で炊くのではなく、ご飯を薄くして醤油を塗って焼くことにした。これは、4歳児の「おせんべいって、どうやって作るんだろう?」という一言から始まった計画だった。

(1) 事前学習

2020年度の事前学習は、2018年度以前に行われていた震災被害にテーマを戻し、ライフラインが止まるこ



① 新聞紙とビニール袋で簡易食器をつくる



② 簡易食器でご飯を食べてみる

写真7 紙製簡易食器の製作と活用

と、家具が倒れ、物が落ちてくること等について学んだ。2020年度の新しい試みとしては、建物の揺れや倒壊のイメージを、段ボールの手作り構造物を使って可視化したことである(写真8①)。これにより、揺れが大きいと建物や、建物の中にある物が倒れることについてイメージを持ちやすくなったと考えられる。

(2) 炊き出し実践

おやつに出された煎餅を見ながら素材や作り方に興味を持った子どもの言葉から、2020年度の炊き出し実践では、炊いた米を潰して(写真9①)薄く焼き(写真9②)お醤油味にして(写真9③)煎餅風の食べ物を作ることにした。煎餅にすることで、保存食としての意味も加わり、炊き出し実践には向いていると考えた。巨釜で炊いてから整形して焼くのは時間がかかるため、レトルトご飯を利用することにした。

2020年度の炊き出し実践は、保育日記にもあるように、子どもたちは煎餅づくりの作業や完成した味を楽しんでいた。

保育日記より(3月24日 4、5歳児クラス)

学年によって活動を分けて炊き出し訓練に参加する。さくら(4、5歳児クラス)はせんべい作り、ひまわり(3歳児クラス)、ちゅうりっぷ(2歳児クラス)は味噌汁づくり。さくらは保育士の説明を聞いて袋に入った米を形がなくなるまで押しつぶす。形が崩れてくると保育士に「どう?」「できた」と見せにきて、「もうお米の形なくなったかな?」と問いかけると自分の米を観察してまた潰す。(略)外に出て鉄板に乗せ醤油をかけると「いい匂い」と話した。味見には「おいしい!」「焼きおにぎりみたい」「お醤油の味がする」「モチモチ」と年長。「おいしい」「お醤油」と年中が話していた。

一方で、下記の保育日記にもあるように、平らにした米を焼き、醤油を塗る工程はすべて保育者が行ったため、例年に比べて子どもたちの実践参加が少なくなったことが指摘された。

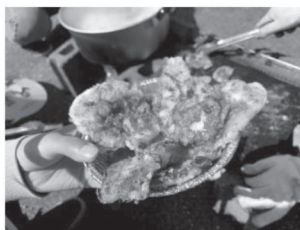
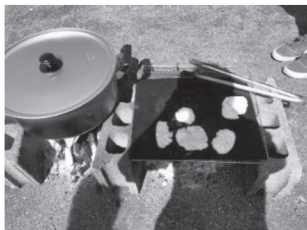


① 建物の揺れを可視化する



② 揺れた家の中を示す

写真8 2020年度事前学習



① ご飯を潰して整形する

② ご飯を焼く

③ 醤油を塗りながら焼く

④ 煎餅風の焼きおにぎりを食す子どもたち

写真9 煎餅風焼きおにぎりを作る

保育日誌より（3月24日 2、3歳児クラス）

ちゅうりっぷ組（2歳児クラス）、ひまわり組（3歳児クラス）は、畑から収穫してあった大根を洗い、味噌汁に入れられるように準備をする。（略）

今回は準備としては活動に入っていたが、実際に作るところは殆ど保育者が行なう形になっていた為、子ども達は見ている時間が長く、自分たちで進めていくような感覚ではなくなり、あきてしまった児もいた。

実践後のふりかえりの際にも、食育要素が中心になり、炊き出し訓練で重視していた「楽しむ」よりも「真剣に取り組む」の原点に戻った方がよいのではないかなどの意見が出ていた。

3.5 2021年度の取組み

2021年度の取組みは、2020年度のふりかえりをもとに、炊飯とみそ汁づくりの基本に戻したが、誰もがより手軽に取り組めることを目指して、ご飯は飯ごうを購入して炊くことにした。また、みそ汁の具材として、3歳児が育てたプランター栽培の小松菜、パッケージ化された原木栽培のしいたけを活用することにした。子どもたち自身が育てた食材を多く使うことにより、「じぶんごと」の意識を高めるためである。また、5歳児が屋外調理を担当している時間に、4歳児以下の子どもたちがどのように過ごすかについては、これまで課題であったが、その時間を「自分で判断して行動する避難訓練」という活動に充てることにした。

（1）事前学習

2021年度初めて試みる「自分で判断して行動する避難

訓練」の際に必要なため、例年の事前学習よりもさらに、地震の折には物やガラスなど危険物が床や道路に飛散してケガをしやすい状況であることを、東日本大震災の写真を使って丁寧に伝えた（写真10）。そのような状況の中、踏んでケガをしないよう歩いて逃げる練習をするためである。「大きな地震が起きたときにどんなことが起こると思う？」と問うと、子どもたちから「冷蔵庫が倒れる」「電気が割れて落ちてくる。窓とかのガラスも割れる」などの意見が出た。

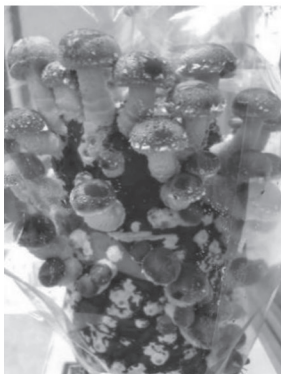


写真10 2021年度事前学習

（2）炊き出し実践

2021年度の炊き出し実践では、事前に3歳児クラスの子供たちは、シイタケ栽培を行い収穫したシイタケを冷凍保存しておいた（写真11①）。また、小松菜はプランターで栽培し（写真11②）、両方合わせて、炊き出しのみそ汁の具材とした。

2020年度は「楽しむ炊き出し」だったが、この活動の目的を見直し、「真剣に取り組む炊き出し」に方向性を戻した。また、子どもたちの仕事も増えたため、子どもたちが飽きることなく、友だちと協同しながら作業に取り組んでいた。大人にとっても初めての飯ごう炊さん（写真11③）でのご飯の出来上がりに子どもたちも喜び（写真11③）、みそ汁づくりでは交替で味見をし、友だちと相談し合いながら味付けを決めていた（写真11④）。みそ汁の味付けを担当していた5歳児たちは、年下の子どもたちがみそ汁をあまりお替りしないことを心配していた。



②小松菜のプランター栽培



③飯ごう炊さん



④シイタケと小松菜の味噌汁

①シイタケの原木栽培

写真11 炊き出しのための野菜栽培と当日の実践

5歳児「あんまり美味しくなかったのかな？年長さんは全員お替りしたのに」
 保育者「シイタケが苦手な子が多かったのかもしれないね。たくさん入っていたから」

真剣に取り組んだからこそ、他児の反応が気になったのだと感じられた。

(3) 避難訓練

避難訓練は指示にしたがって行動することが重要な点では、必然的に受動的になりやすい活動である。しかし、避難行動の大前提には、子どもたち自身が危険を避ける、自分の命を守ろうとするといった意識が必要である。そこで、2021年度は2歳児から4歳児を対象に、物が散らばった場所で、子どもたちが自分自身で経路を探して素早く移動する、すなわち避難することに取り組むことにした。この活動のねらいは、子どもたちが園外でも卒園後も自ら避難行動を実践できる力を身につけることである。

具体的には、写真12のように、保育室に散乱した玩具のブロックをガラス片に、段ボールを壊れた建物や落石

に見立てて、回避し経路を見極めながら非常口まで進むもので、慌てず、かつ素早く動く必要がある。日頃の避難訓練では他児に付いていくだけの子どももいるかもしれないが、このような練習をすることにより、保育者や他児に付いていくのではなく、自分自身で逃げるという意識を持つことを期待する。

結果としては、ほとんどの子どもが真剣に素早く避難行動をすることができたが、2、3名は非日常の雰囲気を楽しんでいることだと考えてしまう子どももいた。真剣に素早く行動できた子どもたちの中には、2歳児、3歳児であっても、段ボールの模擬落石の後に、他に移動できる道がないかと周囲を見渡し、他に危険が無いかと確認する行動が取れる子どももいた。この避難訓練は次年度以降も改善しながら継続していきたいと考えている。

炊き出し訓練の様子は、2021年度に限らず、実施後、玄関に掲示し、子どもたちの様子を保護者に共有している(写真13)。このような情報共有により、2017年度に「楽しめないよ。訓練だから真剣にやるの」という子どもの言葉を伝えてくれた保護者のように、家庭と保育園との対話を生み出すことにもつながっている。



①物が散乱した保育室

②各自、散乱した物を避けながら経路を見つけて非常口(窓)まで逃げる

写真12 自分で判断する避難訓練



写真13 保護者との共有

4. 5年間をふりかえる ～考察に代えて～

執筆者の桑田、野村、伊藤、大塚の4名で、この5年間の炊き出し訓練の取組みについてふりかえりの話し合いを行った。出た意見の概要を下記に示す（下線部は筆者）。

○毎年、前年の課題を整理し工夫しながら炊き出し訓練を行ってきたが、あらためて5年間を通してふりかえてみると、2017年度の子どもたちの主体的な取組みが一番印象深い。これを子どもたちの特性の違いに依拠せず、デザイン、実践していくにはどうすればよいか。

○2年目（2018年度）のときに、子どもたちの豊かな経験よりも危険回避の意識の方がまさってしまったかもしれない。その結果、表面的には例年同じように準備や環境デザインを行っているが、子どもたちは大人の指示に従おうと主体的に行動しきれなかったのではないかな。

○次年度は、危険回避よりも豊かな経験をより一層重視し、子どもたちも積極的に火を扱えるグローブや長いトングなどを準備したい。子どもたちが自分たちで考えて行動できるように、夕涼み会（5歳児のみ対象の料理、食事会）で行ったように、最低限の段取りや注意点を紙に書いて掲示し、子どもたちにとって必要なときに自分で確認できるようにした方がいい。

○事前学習で、炊き出し訓練は何のために必要なのか、そのために何をしなくてはいけないか、どんな危険があるかをこれまで以上に伝えてもよいのかもしれない。それを一番伝えていたのは第1回目（2017年度）だった。だからこそ、関連する質問も多かったのではないかな。

○毎年、子どもたちにとっては初めての体験であるという意識が保育者に薄くなっていたのではないかな。考えてみると、企画担当になったとき「今年は何やろうかな？」と考えている自分がある。子どもたちの特性に合わせた伝え方の変化はあってよいが、基本的には実施内容は毎年同じでよいと思う。

○少なくとも年長さん（5歳児）は数日前からの事前準備（道具を倉庫から出して洗う、備蓄品を出すなど）も

含め、火の始末などすべてのプロセスを保育者と共に行うことが重要ではないか。年長の姿勢が変わると、年下の子どもたちにも変化がある。そういう点では、2017年度だけでなく、今年（2021年度）も年長含め子どもたち全員に積極的な参加の姿勢が見られた。また、子どもたちが事前準備に関われば家庭でも話す機会が増え、保護者との情報共有もより一層増えると思う。

下線部はとくに重要と思われる箇所である。これらを包括的に見ると、子どもたちが炊き出し訓練を“じぶんごと”と考え行動するようになるデザインを考えることが重要であることをあらためて認識したふりかえりであった。

5. まとめ

子中保育園で行っている炊き出し訓練の5年間の取組みについてまとめた。4節に示したふりかえりの知見のように、次年度以降に向けての課題が明確になった。今度も、子どもたちが生き抜く力として必要な避難訓練や炊き出し訓練を実施していきたい。

参考文献：

- [忽那2010] 忽那啓子，文化的実践としての学びをめざして：中学家庭分野「いつでもどこでも応援隊＜炊き出し応援隊＞」の開発と実施検討，日本家庭科教育学会誌，52(2)，120-125,2010.
- [坂本2011] 坂本薫，澤村弘美，災害に備えた食料備蓄と災害時炊き出し，ビタミン，85(8)，430-436，2011.
- [小野寺2015] 小野寺泰子，水谷好成，小田隆史，鶴川義弘，福井恵子，災害発生時の避難所運営を想定した炊き出し研修の実践，教育復興支援センター紀要，3，99-106，2015.
- [伊藤2019] 伊藤千晶，大塚裕子，自己選択を重視したお別れ遠足のデザインと実践，第13回保育実践研究報告集，日本保育協会，2019.

講評：生きる力を育む炊き出し訓練

評者：天野 珠路

いつでも、どこでも、どんな時でも自然災害は起こりうる中で、各保育現場が園の特性や地域性を活かして災害対策を講じることが求められます。想像力を働かせて様々な事態を想定し、園全体で子どものいのちを守ることが社会的な使命であるといえるでしょう。

本作品は、災害時の炊き出しに着目し、そのダイナミックな取組を継続的に行ってきた記録です。幼児が炊き出しを自分のこととして理解するのはハードルが高いように感じられますが、経験を積む中で子どもたちが主体的に参加し関わる姿も記録されており、食育の実践にもつながっています。保育者自身がこの取組の中で得たと思われるサバイバル能力は日常の保育の中でも活かされているのではないのでしょうか。

実際の災害時にはまずは子どもたちを守り、安全なところに避難することが必要になるでしょう。しかし、その後すぐに食糧の確保と提供が「命綱」になることも十分考えられます。園の備蓄などについて各現場でしっかりと対策を練り備えていくことが必要です。

評者：高木 早智子

5か年分の「炊き出し実践」の記録として、とても興味深く読ませていただきました。食育や災害を想定した避難訓練に取り組む園は数多くありますが、根拠をもって「炊き出し実践」をされている園は貴重だと思います。炊き出しの際の食器を、非常時を想定したものにするなど、工夫も随所にみられ、同じ保育に携わる者として、参考になりました。ただ個人的に気になったことは、屋外排せつや事前学習などによる、子どもたちの羞

恥心や抵抗感、恐怖心について、幼児の心理発達段階をどのように踏まえているのかという点です。例えば事例の中で、事前学習中に「怖い」という子どもの発言があり、「先生がいるから大丈夫」と答える場面において、声も出せず、漠然とした恐怖だけを感じていた子どももいたかと思われます。災害に対する恐怖心をもとに、自分の身を守ることを考えられるようになるのは少し先の発達ではないのでしょうか。ご一考いただければ幸いです。

評者：日吉 輝幸

児童福祉施設における災害対応は、その施設が存在する地域の気象条件や立地条件に応じた対応が求められます。南海トラフ地震や首都直下型地震の影響が心配されている、神奈川県下の子中保育園にどのような対応が求められているのかは分かりませんが、災害時の対応として何故炊き出し訓練をすることが必要かを、事前に子どもに知らせていることは良いと思いました。また、災害用備蓄食品をローリングストックの考え方に基づいて、炊き出し訓練を行うことは単に廃棄するより良いことだと思います。

しかしながら、児童福祉施設である保育所では、災害時に優先すべきことは子どもの身体・生命の安全確保をしたうえで、一時でも早く保護者へ受け渡すことが大切であることは言うまでもなく、保護の対象である子ども自らが炊き出しをするような、サバイバル体験は少々過剰ではないかと考えます。園としては、保育者がいかにスムーズに園児に非常食を提供できるようにするか、などの訓練は必要だと思います。また、園で栽培している野菜を炊き出し訓練に使用されていますが、災害時の対応と食育体験は分けて考えられた方が、双方の深まりもあり良いのではないかと考えます。

課題研究③ 子どもの健康・安全 運動を通して育つ健康な体と心 ～こども一人ひとりの心身の発達をめざして～

沖縄県・第2 愛心こども園 仲西 久美子

1、はじめに

当第2 愛心こども園は、令和2年4月より保育園から保育所型認定こども園へ移行した。

乳幼児期から積み重ねられていく教育の必要性や、こどもの発達や学びの連続性を踏まえ、幼児期における探求心や思考力、表現力等に加えて感情や行動のコントロール、粘り強さ等の非認知的能力を育むことが、その後の学びと関わる重要な点である事を痛感している。

そこで、養護と教育の両方を担う機能を持った保育所型認定こども園として、こども達の気になる運動・体力面等について、こども一人ひとりの心身の発達をめざして実践研究に取り組んだ。

2、実践に至る背景

私達保育者は、保護者への支援や子育て支援等が義務付けられており大きな役割を担っている。

日頃より保護者には、こどもの姿を（生活面、教育面、成長発達面等）、コミュニケーションを図りながら伝え、信頼関係を構築できるよう努めている。これまでも遊びの中でケガをさせた時、保護者には丁寧な説明を行い、安全面に留意する旨を伝えているが、中には理解を得られずにトラブルへと発展しまうことも少なからず経験した。

研究設定の理由として、この1～2年はコロナ禍の中で生活が一変し、こども達の現状としては、これまでと同じような活動ができず、十分な経験の場がもてなかったり、転んだ時に体の使い方がわからず手を出せずに顔から打ってしまう事もあった。

そのような中でも、こども達に多くの経験を通して充実感を味わせたり自信を身につけさせてあげたい。更に安全・安心な環境は、教育・保育をするうえで一番大事なことであるということを踏まえ、近年低下しているといわれているこども達の運動能力・体力・筋力を向上させ、病気やけがに負けない体作りを共に支えてくれる、幼児の体育専門である講師を月2～3回招き体操教室を取り入れることになった。専門講師からの指導は園児だけではなく、職員向けに幼児の体の使い方、特徴を教えて頂き、こども達がより伸び伸びと遊べる環境構成を提供し、また、こども自ら危険を予測し行動へと移せるようになることを願い、実践研究を進めることにした。

3、研究の目的

- ・自分の体を知る。
- ・体を動かす事で、手足や体全体の使い方を知る。
- ・体を動かす事の楽しさを十分味わい、丈夫な体をつくる。
- ・友だちとの関わりを通して、経験の中から相手の存在を認め、自ら主体的に教える中で自己肯定感を培う

4、研究の方法

- ・令和2年4月～令和3年6月（1年3か月間）
特徴のある園児の体の動きや発達過程を観察していく。

5、事例と考察

【事例1】

「つかまって立っち」 K君 1歳0ヶ月男児
探索活動が盛んで、ボールをずり這いで追いかけたり、徐々に一人で座れるようになる。

上体を起こし目の前の柵につかまり立ちを始めるが、月齢よりも身体発育が大きい為、自らの体を持ち上げられず横に倒れこんだり、立ち上がってもうまく踏ん張れずにふらつき感がみられるため、本児は自らつかまり立ちをしようとしなない。

エピソード① ～経験して欲しい事・育つ力～

- 視界が広がる楽しさを感じる
- 足の筋力や背筋力、腹筋力やバランス感覚を身に付ける

【導入】

強度のあるバナナの空箱を2個重ね固定する。周囲には色画用紙を貼り付け、こども達の大好きなキャラクターイラストを拡大し貼る。穴の開いた箇所を両サイドにして、転倒防止を兼ねて重しのペットボトルを中に入れる。箱が動かないよう片面を柵に貼り付けて設置する。

【遊びの様子】

ずり這いで探索をしていたK君。保育教諭が「K君おいで～」と、つかまり立ちに誘うと、K君も柵につかまりながら、箱に手を掛け一人でつかまり立ちをする。

「K君、たっち上手だね～できたね！」と、言葉をかけると保育教諭の顔を見ながら、「できたよ～！」というような愛らしい表情を見せてくれた。更にもたれかか

りながら、箱に貼られたキャラクターイラストの「ワンワン」を興味深く見る。片手で箱を軽く叩く仕草も見られ、他児もその様子を見て集まってきた。K君とは対面になるよう移動し、箱を叩く他児。「トントン」と音が出る事が嬉しく楽しいようで、K君も「叩く」動作に興味を持ち始め、箱を叩いてみる。今まで、不安定でつかまり立ちをしなかったK君が、怖がることなく片手を離し、箱を叩くという動きに繋がったことはとても嬉しかった。

そこで、保育教諭は遊びを広げる展開を仕掛け、日頃からよく歌っている「大きな太鼓」の歌をうたってみた。K君をはじめ、箱を叩きながら友だちの顔をみたり、又、体を左右に動かしてみたり、リズムをとる他児の姿も見ることができた。

【保育者の想い】

幼いながらも、活動を通して乳幼児期の三つの視点にもある「身近な人と気持ちが通じ合う・身近なものに関わり感性が育つ」と言われている受容的・応答的な関わりの中で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係が生まれ、生活や遊びの中で様々な物に触れ、音、形、色、手触り等に気付き、感覚の働きを豊かにする等、人と関わる力、興味や好奇心をもって関わり表現する力が培っている結果となり嬉しく思う。



つかまり立ち用の箱



壁を触って立つことを楽しむ様子

足で高さを探りながら上がってる姿

【考察】

つかまり立ちの初期の頃は、姿勢が不安定でバランスを崩しやすいので、注意して見守る必要がある。安心できる保育教諭からの呼びかけに、自分でやってみようとする意欲や達成感を、こどもの表情から感じとる事ができた。また、友だちの動きを模倣することで活動を共有

でき視界が広がる楽しさを感じる事ができたのは良かった。更に一日の遊びの中で、立つ姿勢の内容の遊びが増えた事によって、床にしっかり足裏をつけ、足の筋力で立っている様子がわかり、ぐらつくことなくバランス感覚が身についてきたように感じられる。

このような動きを通して、この後に続く伝い歩きや一人立ちに必要な力を蓄えていけるよう、重しのペットボトルを取り出し、歩行を楽しめる押し車的役割に変換させ（押し箱）活動を工夫して遊びを展開していきたい。9月末のミニ運動会では、変換させた押し車を押し、伝い歩き歩行を楽しむ姿が見られた。

【事例2】

「体を動かすって楽しいね」 S君男児 4歳～6歳までの記録 ～4歳児クラスからの約1年3か月までの本児の様子～

身長も高く体格の良い男児だが、どちらかというと体を動かすことはあまり得意ではなかった。令和2年4月より3歳児以上クラスから専門講師を招いての「体操教室」が導入された。（体操教室年間指導計画・資料1）

元気のある専門講師に指導されながら、その年齢にあった目標やねらいを作成し、担任も加わり無理なく体を動かす楽しさを味わい経験させていく中で、友だちとペアになって行う「手押し車」を行う際、S君は、相手の子に足首を掴んでもらったが、自分の体を支えきれずにいた。何度かチャレンジするが、うまくいかない。

できないことが悔しかったようで、これまで笑顔で楽しく参加をしていた体操教室だったが、手押し車の活動になると、S君の笑顔が少なくなってきた。

エピソード① ～経験して欲しい事・育つ力～

- 体全体の協応運動の経験
- 腕力をつかった動作（雑巾掛けなど）
- 仲間との深いつながり・協同性
- 豊かな感性による表現

【導入】

専門講師と話し合いを重ね、本児の特徴を捉える。

バランス感覚の獲得や自らの体の仕組みを知らせる。

（転び方の獲得）

体幹を鍛えてみる⇒雑巾掛け⇒腕力を鍛える工夫

【実践】

まずは、自分の体は自分で守る事を知らせてみた。専門講師による転び方の指導を受け、マットの上で安全確保をしつつ、故意に転ばせてみた。

転んだら恥ずかしいという羞恥心はあるものの、みんなが転ぶ様子を見て恥ずかしさは薄れてきた。（手押し車の際に転倒することを恥ずかしがっていた）



転ぶ練習①



転ぶ練習②



体の柔らかさを体験

次に、雑巾掛けをグループごとで行って見た。はじめは、なかなか思うように前進することが出来なかったが、やり方を習得し、友だち同士で教え合う姿も見られるようになった。

体の仕組みを理解できるようになり、園庭に出ると鉄棒に挑戦する子も増え、握力、腕力、支持力等がみるみる育ってきたことが伺えた。腕力にも力が付きはじめ、手押し車も前進できるまで成長した。令和3年S君は、進級し5歳児クラスになる。トランポリン、跳び箱5段にもチャレンジするようになる。就学に向け縄跳び遊びを取り入れた際、苦手意識が強くうまく跳ぶことができなかったが、縄が体に当たると痛いという事から、まずはフラフープを導入し、跳ぶことの楽しさを経験させてみた。タイミングを合わせジャンプの練習を遊び感覚で行うと、コツをつかみ自ら進んで挑戦しようとする姿が見られ始めた。

【保育者の想い】

令和3年の10月運動会を目前に、コロナ感染症等での登園自粛期間が長期にかけて要請されたが、こども達は友だちとの関わりを通して幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿でもある「健康な心と体」を意識し距離を

保ちながら、日頃から楽しく体を動かす事を経験することができ、成長が感じられた事を嬉しく思う。

【考察】

何事に対してもやる気と意欲を持つS君であったが、出来ないことがあるとすぐに諦めてしまう姿があった為、担任同士どうすれば自信に繋げながら楽しく参加することができるのかを考え、専門講師にも相談をしながら、良きアドバイスもいただき実践へと取り組むことができた。日々の小さな積み重ねが大切な事を今回の活動で学ぶことが出来た。

この経験を得て、今後は保護者に対しても、こども達の体の動きや特徴、成長発達段階等を伝える機会を作っていきたい。

6、2つの実践事例の振り返り

0歳児から5歳児（就学前）の乳幼児を預かる保育所型認定こども園としての魅力である、乳児期からの育ちの連続性を踏まえ、寝返り、這い這いの充実、つかまり立ち、歩行の完成といった一連の運動機能と成長過程の時期を共有できるすばらしさをはじめ、個別記録の大切さも実感した。事例1の0歳児クラスの内容より、養護



自分の体の動きを知る（3歳児）



安心して瞬発力を育てる



協応運動を無理なくおこなう



腕力を鍛える運動（4歳児）



雑巾掛けの様子（5歳児）



縄跳びを楽しむ様子（5歳児）

は基本中の基本であること、発達課程にあった応答的なふれあいや言葉かけを通し、愛着関係を確立すると共に、こどもとの継続的な信頼関係の大切さに改めて気づかされた。一人ひとりの成長過程は個人差があるものの、気になる場合は受診を進めたほうがよい場合もあるため、私たち保育者はしっかり成長を見極める必要がある。

また事例2では、体格は大きいものの、体幹の弱さや手足の筋力の弱さが関係している事がわかり、生活や遊びの中で取り入れられるものはないかと考え、雑巾掛けを取り入れてみたが、この動作に対する不安やケガに繋がるのではないかと躊躇してしまう事もあった。しかし、体操教室で腕力を鍛える運動等により、自分の体の作りを知り得たこども達は、出来る事の喜びを味わい、不安だった雑巾掛けも前を見ながら進む事や、背中とおなかに力を入れるポイントを経験する事で、ケガをする事もなく楽しそうに掃除をする様子が見られた。この活動で知り得たことは、体幹が鍛えられることにより、人や物にぶつからないようにする空間認知力も培われる。

また運動の楽しさをこども達自ら実感することが大切で、多様な動きを身に付けながら、発達に応じた様々な遊びを体験し、繰り返し行う事でできなかったこどもも次第に動きを獲得するようになる。「できたー」「膝をついたら進まないよ」「僕みたいに手を伸ばして前を見るといいよー」とできずに困っている子に対し、互いに協力をし合い、自主的に「相手にわかるように教えてあげる」、育って欲しい10の姿にもある「道徳性・規範意識の芽生え」も同時に育まれている事が感じられた。

7、まとめ

当園の法人理念に掲げている「思いやり保育」の3つの約束「手伝う・励ます・ありがとう」の行動が自然に見られ、「ありがとう」の言葉も毎日の生活の流れの中で交わし合うようになった。更に相手に喜んでもらう経験を積み重ねることによって、自分に自信を持つことができ、互いに思いやる優しさや喜びが広がっている事を実感した。

私たち保育者も上手にできたらいっぱい褒めて認めてあげながら自己肯定感を培い成功体験の積み重ねが自信にもつながったように感じられる。今回の実践研究テーマである「運動を通して育つ健康な体と心」。改めてこどもの発達段階の特徴と成長を学ぶことができ、自発的、自主的にこども達から「やってみよう！やってみたい！もっとやりたい！」の表現力の豊かさを感じとることができた。

怪我を恐れて制止するのではなく、こども一人ひとりが生き活きと伸びやかに成長していくことを願いつつ、生命の保持（養護）が基盤となり、その上で情緒が安定し、心の安心と安全な環境づくりを行うという私たちの大切な役割を心にとめ、今後も保育者間で創意工夫をし教育・保育の内容充実が図れるよう取り組んでいきたい。

参考文献：

『発達がわかればこどもが見える』

監修・田中 真介 著・乳幼児保育研究会

『新 幼児と保育』 編集・阿部 忠彦

(資料1) 体育遊び 予定表

ひまわり体操教室

月	名称	内容	目的
4月	リズム体操	軽快なリズムに合わせて体を動かす	楽しんで体を動かす事ができる
	ストレッチ運動	手・足・腰・首・ひざ等十分に伸ばし、柔軟性を養う	体育遊びにおいて怪我をしにくくするために十分に行う
5月	いろいろな歩き方	前・後ろ・横歩き動物に変身して歩いたり、走ったり	歩く・走る・ジャンプ・転ぶ・動物に変身！かけっこで転んでも最後まで！
	道具を使って	跳び箱・マット・平均台などを使い運動を行う	色々な道具を使って運動を行う楽しさを身につける
6月 7月 8月	ジャンプあそび	輪っか：両足ジャンプ ハードル：走ってジャンプ 片足ジャンプ：バランス	少しずつ運動量を増やし、楽しく体力の向上を養う
9月 10月	組体操	組体操：1人組・2人・3人・6人そして全体で行うものなど、力を合わせて！	みんなで力を合わせる 頑張った成果をみってもらう
11月	体育あそび	マット：倒立前転・側転 平均台・跳び箱・鉄棒など	体育あそびから少しずつ体育へ
12月 1月	なわとび ボールあそび	長縄跳び：大波・小波・まわしとび ボール遊び・サッカーなど	何回跳べるか？挑戦！ ゲームを通じてルールや協力を学ぶ
2月 3月	総合運動	今までに行った色々な体育あそびを総合的に行う	一年間をとして強い心と体をつくる 楽しみながら体力作りを行い、自然に更なる飛躍を願う

項 目

育てたい内容

- マット・・・表現力を豊かにし、機敏性、協調性を育てる
- 跳び箱・・・走力・跳力・勇気・判断力を育てる
- 鉄棒・・・握力、腕力、支持力、判断力、冒険心を育てる
- 平均台・・・平衡感覚、リズム感、勇気、表現力の豊かさを育てる
- なわとび・・・心肺機能の発達、リズム感、脚力、跳躍力を育てる
- ボール・・・集中力、運動能力、判断力、社会性、協調性を育てる
- 輪・・・リズム感、バランス、注意力、判断力
- 組体操・・・協調性、注意力、判断力、社会性、できた時の喜び、達成感を育てる

評者：小林 芳文

本研究の背景でも述べているように、この1、2年のコロナ禍の中での生活で、子どもたちも従来通りの保育や遊び、活動ができなかったことから、先生方は、不足がちな園での運動に目を向けて研究されました。まず、その取り組みに敬意を表したいと思います。

運動による保育で、健康や発達の基礎づくりができることに着目したことには賛辞を送ります。ただ、研究の事例1、事例2がなぜ取り上げられたか、その根拠がはっきり伝わってこないため、研究の重みが見られませんでした。2つの事例の振り返りで述べられていることを、取り上げた根拠に入れても良かったのではないのでしょうか。また、それぞれの運動実践が写真を通して挙げられていますが、伝統的な指示型の体育に近い活動、少し訓練ばい場面が見られ、特色のある面白い運動として感じられなかったことは残念です。幼児期の保育による運動は、遊びの要素をふんだんに持った楽しいものです。さらなる研究を望みます。

評者：田和 由里子

子どもたちの運動能力・体力・筋力を向上させることは、日々の保育の中で活動が制限され、例えば転んだ時の対応など自然に身につけていたものができない状況にあります。そこで、体育教室の専門講師による指導を受け職員が自らも実践したことの研究です。事例も2点に絞ってあり、また活動がわかるように写真が掲載されておりわかりやすかったです。目的に対してのまとめが詳しく記載してあれば良かったと思います。

今回、0歳児と4・5歳児が対象でしたが他の年齢ごとの発達の違いを研究しても良いと思われ

ます。

評者：馬場 耕一郎

近年低下しているといわれている子ども達の運動能力や体力に着目した研究です。

子ども達の身体の動きの観察から、自分でやってみようとする意欲や達成感を感じることができたことは、保育者として大きな気づきになったと思います。また、友達の動きを模倣する活動は、他の子ども達から受ける刺激となり、集団生活の良い点であると思います。これからも怪我を恐れず制止するだけでなく、生き生きと伸びやかに成長していくことを願っています。

課題研究④ 【第16回特別テーマ】新型コロナウイルス感染症対策について

お互いの命を守ること、子ども達の命と学びと遊びを守ること

◎新型コロナウイルス感染症対策プロジェクトチーム結成による実践報告

東京都・社会福祉法人東京児童協会 新型コロナウイルス感染症対策プロジェクトチーム

馬場与志子（すみだ川のほとりに笑顔咲くほいくえん）

前島 記子（ひらがなのツリーほいくえん）

石田 安方（台東区立たいとうこども園）

斎藤 香織（事務局）

【問題提起-背景】

2020年3月、未曾有の新型コロナウイルス感染症のパンデミックが起きた。

当法人は、都内に21園の保育園、こども園を運営しており、職員約700人、園児約2200人が所属している。突如として保護者、職員の家族を含めると、約1万人の命が未知なる感染症にさらされることとなった。私たち事務局は、職員と子ども達の命を守るべく具体的な感染症対策、これから社会生活に迫り来る様々な困難や混乱、職員の不安の軽減など何をどのように整えれば、感染者数や不安を最小限にすることができるのか？どう役割を果たすべきなのかという危機を感じた。

【目的】

職員の健康と社会生活を支えることで保育を継続することを重要と考え、「お互いの命を守ること、子ども達の命と学びと遊びを守ること」を目的とした。

【方法】

1. 法人内～新型コロナウイルス感染症対策プロジェクトチーム～発足。
今、何が必要か！次に何をすべきか！をリアルにイメージを膨らませながら目的を果たすべくルール作りや方針決定、保護者への呼びかけ・園児向け健康教育など様々な取り組みを行った。
2. 当法人が新型コロナウイルス感染症をどのような対策を講じてこの1年半を乗り越えて来たかを、感染の波に沿って経時的（5期）に分け、今回はその中の①感染拡大防止 ②職員への啓発 ③陽性者発生時フロー作成に絞り、2021年10月時点までの経過をまとめたので報告をする。
3. 今回のプロジェクトチーム発足に意義があったかを振り返るとともに、プロジェクトの今後について考えていく。

【取り組みの内容】

*第1期 発生直後 2020年3月～4月

世界的な陽性者数・死者数の増加により、ロックダウンなどという言葉やニュース映像で誰もいない街の様子など異様な雰囲気を目の当たりにした。市中感染が増え、当法人も様々な保護者の職業や家庭環境、子ども達の健康と遊びや学びの保証など、今後襲ってくるであろう現実に不安が募った。

そこで、3月8日に対策プロジェクトメンバーとして法人の中から看護師である園長1名、一般企業勤務経験のある副園長1名、大学病院経験のある看護師1名、人事課長1名の計4名が任命された。

まずは、理事長より職員・保護者向けに感染拡大防止の具体的な基本方針が出された。また、濃厚接触者の定義がままならない状況の中で各園の不安が現実的なものとなってきた。現場の混乱や感染予防のために、「職員の家族が罹患者もしくは濃厚接触者になった場合のフロー」を作成した。この頃は、マスクや消毒用エタノールの供給不足が問題となっており、マスクの着用や手指消毒の方法の徹底も促した。職員の中にも「自分がコロナになり、職場に感染を持ち込み迷惑をかけたらどうしよう。」という不安を抱えながら、業務に就いている職員も多く、風邪症状による強い不安を抱く職員も少なくなかった。まだPCR検査が身近なものではなく、診断がつきにくい状況であったため「診断結果報告書」を職員の診察記録とし、「出勤の基本指針」「職場復帰のタイミング」の基本ルールを提示した。当法人では、この頃から園を統率する園長が孤独や曖昧な判断をしないためにもオンライン会議を早急に取り入れ話し合いの場を設けることにした。その中で、次に備えるべく「緊急事態宣言が発令された場合のフロー」を準備した。そして、過去想像もしていなかった在宅勤務に向けての構想を練り始めることとなる。

＊第2期 初の緊急事態宣言発出による休園から再開
2020年4月下旬～6月

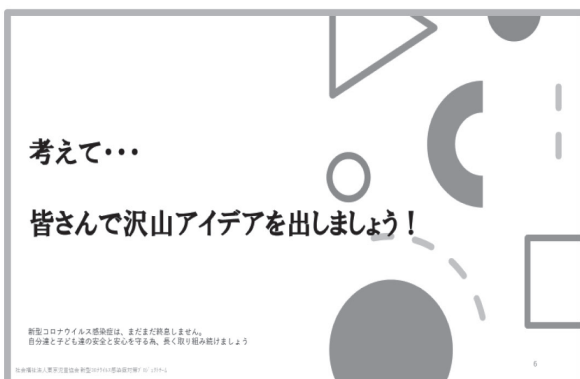
社会が初の緊急事態宣言に突入した。法人では改めて指針を見える化し、社会や法人内に「新型コロナウイルス感染症への取組み」をまとめた。(添付1)

6月には園再開という運びとなり、5月下旬には理事長より職員へ意識の統一に向けて動画による「感染拡大防止に掛る行動指針」を発出した。また、職員一人ひとりの意識の向上、感染防止の基礎知識習得を目的に「コロナウイルスに負けない」(添付3)を作成し、パワーポイントで園再開前に全職員の理解を深めることも行った。その上で、本格的な感染症対策徹底のために「標準感染症予防策：スタンダードプリコーション」を基準に「チェックシート」を用い感染症対策を行った。その中で、

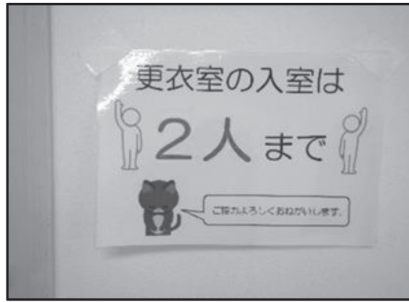
互いの園がどのような具体策を講じているかを写真で全園が共有した。

今回の感染症により、「3密を防ぐ」などの対策から園の行事の中止や職員の食事や休憩の黙食や単独の行動などで、新入職員はじめ多くの職員の孤立感、焦燥感を推測した。一人暮らしの職員なども多いことから、休園中はオンラインを利用し職員全員で集まり今日の出来事を話したり、ラジオ体操をしたり、クイズを出し合ったりしてコロナうつ予防にも努めた。

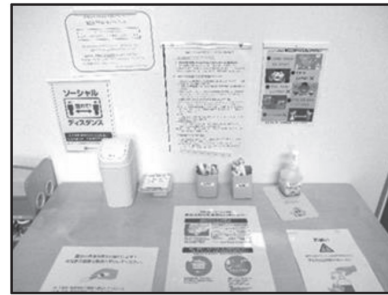
また、自分自身への備えとして急な受診病院、コロナ時の災害発生の避難の仕方や避難場所を携帯するよう「私の緊急時行動メモ」(添付2)として推奨するなどコロナ社会におけるストレスの軽減のための発信や取り組みなども行った。



バックヤードへの注意喚起



園 玄関の様子



登降園の受け入れ訓練風景



食事時の工夫



* 第3期 2020年7～9月 第2波到来

園は再開したものの今までは違ったコロナの中での保育に、どう対応したらよいか疑問や迷い、不安に直面した。毎日の保育活動においても散歩の人数や手つなぎ、歌はうたえない、給食の食べ方、午睡での布団の向き、エアコンの作動中の換気、職員・園児・保護者の体調不良時の対応など、予想以上に感染対策を意識する余り、子ども達にも不便な思いなどをさせてしまった。ど

んなに準備をしても正解のない中での緊張感が続いた時期だった。そこで、「新しい生活様式」として、登降園・戸外活動・室内遊び・給食・午睡・行事などについて具体的な行動内容をまとめ、保護者にも共有し理解を得た。保育活動を拡大するにあたり、園児の登降園の方法や外部講師、保育・栄養士実習生受け入れの対策の中で、「体調等確認書」「2週間健康観察記録」なども用意し感染対策に努めた。

食事時の注意点

感染を広めない為の対策の再確認をお願いします！

感染を広めたいためには
マスクをはずす
場面がPoint
食事 おやつ

2 距離は **離す!**
アクリル板は**頭の上までの高さが必要!**
(職員/園児)

頭が隠れる事!

7714板等

15m

15m

1 職員は子どもと**一緒に食べない!** (休憩・おやつも出来れば一人で)

子どもが食べる時はマスクしたまま

食事は1人で

3 食事とおやつ時 **誰と?**
→ 記録を残す (職員/園児)

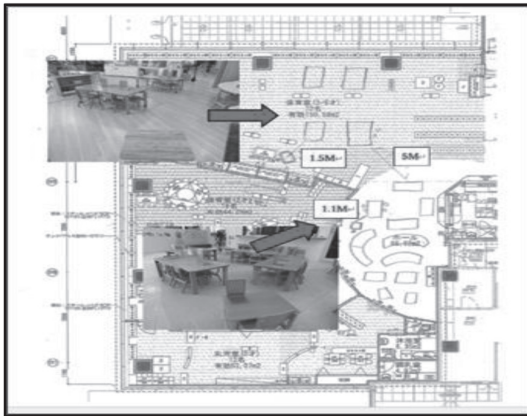
***第4期 2020年10月～2021年3月withコロナ時代 第3・4波到来（緊急事態宣言延長）**

世の中では、GoToトラベルなどの施行開始後まもなく、法人内でも保護者や職員の家族などが続々と陽性や濃厚接触者になり始めた。当法人でも年末年始に園内で陽性者が発生し、保健所と連携し対応を行った。園内の濃厚接触者を早急に認定するために職員の行動や保育の

流れ、関係者住所録、室内環境などの情報提供をした。この時は、園児のPCR検査を園内で行ったため検査の体制を整え施行した。

年末年始という事と園の職員は濃厚接触者となり対応が出来る職員が少なかったため、法人内の園長や看護師が応援に行った。その中で、陽性者発生時の様々な準備が必要と考え「緊急体制表」「感染者発生時のフロー」を作成し、発生時の対応に備えた。

園内環境図(保健所に提供)



乳児 PCR 検査(園内にて)



***第5期 2021年7～10月（第5波）**

当法人内でも数園が休園となることもあったが、第4期で準備したものが活用され円滑に自園で対応することができていた。この頃からコロナワクチン接種の普及が活発となり、10月末には法人職員全体の80%以上が2回接種を終えることが出来ている。コロナワクチンは2回目の接種翌日に発熱や注射部位の強い痛みが副反応として現れることが多いことが示されていたので、ワクチン接種のためのシフトの調整などの配慮も行った。しかし、9月には第5波のデルタ株の感染拡大で若者と子どもにも感染する、無症状の陽性者、濃厚接触者が認定されないなど感染の傾向に大きな変化が起きた。そして、全国的な医療崩壊や自宅療養などの現実新たな生命の危機を感じた。この事態にエッセンシャルワーカーである私たちにできることは「互いが陰性であることを確認し、安心して子ども達と互いの命を守る」ことではないかと考え、内閣府のPCRモニタリング調査に参加することとした。10月の1か月間で延べ検査数約1,550件、全検査結果陰性であった。この結果により、安全を確保して園運営を実施することができた。

【結果】

感染予防はどうだったかを振り返ると、消毒の徹底や保護者・職員間の協力で重症化した者や重症化することなどなく、最大限の感染対策が出来たのではないかと考

える。また、陽性者が発生した場合も早急に他園児、他職員の感染予防に務めるべく行動ができた。休園時や再開時に向けての準備も全職員で前向きに取り組むことが出来た。次に、エッセンシャルワーカーとして、職員が健全に社会に貢献する意識のもと、心身の疲労などで退職や休むような事案はなかった。各々自分の健康管理を行いながら日々の保育に当たり、社会生活を送ることが出来たのではないかと考える。また、各園様々な事項や問題が発生した中で、全園園長・主任と職員が共にお互いが支え合い、一生懸命に乗り越えてきたと言えるのではないかと考える。

【まとめ・考察】

今回、プロジェクトチームとして苦労した点は、職員への様々な取りくみが協力の要請であり、こちら側の期待と受ける側の納得感、実働の中での業務の追加や変化に対応しきれていたのか。ルールや指針を多く発信したものの本当にそれらが対象者（園長・職員）に十分に意図や内容が伝わっていたか、分量は適切であったかは疑問も残る。現場の温度感や手技なども考慮し発信する内容を考える必要もあったかもしれない。

今回プロジェクトチームを発足し活動を行った。そこには何が必要であったかを考えると、『プロジェクトファシリテーション価値と原則編』の中で（株）永和システムマネジメントの平鍋氏は「プロジェクトが扱う問題に関する【ドメイン（知識）スキル】と【ヒューマンズ

キル】が必要です。対人コミュニケーション能力、交渉能力、プレゼンテーション能力などがこれにあたります。ヒューマンスキルがないと、ドメインスキルを持っていてもそれがうまく活かされません。」また、「チームで1つのことに取り組むには、【対話】【行動】【気づき】【信頼関係】【笑顔】が必要である。」さらに、「ゴールと役割分担を明確にして目的を達成に向かい、改善していくことが大切である。」と述べている。

今回、私たちが、現実（予測）の問題を捉える→実現可能な内容を提案する→わかりやすく発信する→同感を得る→実践する→結果を見る→評価するという、PDCAサイクルを基本とすることを改めて学んだ。

幸いに、現在法人内では重症者や後遺症で休職、コロ

ナうつなどという人は出ておらず、本日現在は職員・園児・保護者も変わらない生活を送ることが出来ている。

最後に、作成したフロー・周知文・マニュアルなどを今年度中に1冊の冊子にまとめ、今後の感染症対策や緊急発生対策に生かすことが出来ないかと期待している。

コロナプロジェクトチーム発足と、この間ご理解いただきました多くの皆様に感謝し、1日も早いコロナウイルスの収束を願い、今後も研鑽したいと思う。

参考文献

「プロジェクトファシリテーション価値と原則編」

(株) 永和システムマネジメント オブジェクト倶楽部 平鍋健児/天野 勝

講評：お互いの命を守ること、子ども達の命と学びと遊びを守ること

◎新型コロナウイルス感染症対策プロジェクトチーム結成による実践報告

評者：天野 珠路

コロナ禍における感染症対策及びチームでの実践記録は今後の参考になる貴重なものです。あまりに深刻な影響を与えかねない新型コロナウイルス感染症の危機的状況に対して、真剣かつ強い決意を持って臨まれたリーダーの気概とともに、迅速かつ適切な対応を試みたことに感心させられます。さらに全職員で共有し、園の課題だけでなく地域全体の課題にもつなげ考え続けていただきたいと思います。そのためにも作成したコンテンツや資料はたいへん有効です。

少人数のリーダーたちによるプロジェクトチームであり、重要な視点が盛り込まれています。さらに子どもの保育内容や保育実践との関連で、保育現場ならではの具体的な取組がより丁寧に記録されていくことで、保育者の専門性に係る視点が浮き彫りにされることでしょう。

評者：田和 由里子

今のコロナ禍における研究は、とても大切であると感じました。まとめも「期」に分けての報告だったのでわかりやすかったです。また、複数施設での取り組みのため「プロジェクト」チームを立ち上げ最低限の人数で対応したことは、作業がはかどり良かったと思います。次の陽性者を出さないという事にもつながると思います。

「子どもたちの命と遊びを守る」とあったので具体的な保育の内容が示されていれば良かったと思います。添付資料も数多く掲載されていたがもう少し大きい方が良いと思われました。終息の見通しが見えない中の保育ではありますが、子どもたちが安心して過ごせる環境をこれからも模索し

て頂きたいと思います。

評者：馬場 耕一郎

新型コロナウイルス感染症をきっかけに、「今、何が必要か、次に何をすべきか」をルール化していった研究です。どの園も手探りで苦労されていると思います。保育現場では、対応に追われるために、記録や振り返りの場を持ってないことも多いと思います。しかしながら、きっちりと記録をされ、行動指針を策定されたことは大変素晴らしいと思います。また、コロナ鬱にも対応されていることは心強いです。今回の研究は、想定外の事態が生じた際の対処方法としても活用が期待される所です。